様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月　８ 日現在

機関番号：８２６１９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ００９３０

研究課題名（和文）東アジアの宮廷工芸に関する物質文化研究　ー相対的文化史観に基づいてー

研究課題名（英文）Material culture research on East Asian court crafts on the basis of a relative cultural history perspective

研究代表者
猪熊　兼樹（INOKUMA, KANEKI）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・室長

研究者番号：３０４１６５５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：東アジア文化圏の中枢にあった中国の宮廷では儒教的秩序の維持に努め、その理念を礼制によって具現した。礼制は身分に応じた建築・器物・衣服などの形式や意匠の規格に言及するために物質文化と密接な関係をもつ。そして、礼制は東アジア各地の宮廷に広がり、時空を超えた普遍規範となって国家の公式空間である外廷を形成した。一方、君主の私的空間である内廷は各地・各民族の背景にある風土や生活習俗などが反映した工芸によって形成された。従って、外廷の宮廷工芸には東アジアの共通規格が現出し、内廷の宮廷工芸には各地・各民族の基層文化が現出するので、各宮廷を相対的に検証するうえでの好資料となることを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
東アジアの宮廷工芸（宮殿・調度・服飾）の研究については、従来のような年代・様式・技法などに関心をおく美術史的見地ばかりでなく、宮廷の儀式・行事における身分・立場・状況などを表象する物質文化として理解する観点が重要であることを示した。東アジアの宮廷工芸には、礼制に基づく共通規格とともに、各宮廷の背景にある風土・社会・制度・習俗などを反映した相異特色も現出するので、相対的に検証するうえで好資料となるという観点を示した。本研究は、諸文化を相対的に論じる文化相対主義的歴史観に基づくため、その研究成果は、諸文化の相異特色について合理的に理解し、今日的課題である多文化共生に資する歴史研究となるであろう。

研究成果の概要（英文）：The Chinese court, which was the centre of the East Asian cultural sphere, maintained a Confucian order and embodied its ideals through a system of rituals. The ritual system is closely related to material culture as it refers to standards of form and design for architecture, utensils and clothing according to status. The ritual system then spread to courts throughout East Asia, where it became a universal norm that transcended time and space, forming the outer court, the official space of the state. On the other hand, the inner court, the private space of the sovereign, was formed by crafts reflecting the climate and lifestyles and customs of each region and ethnic background. Therefore, it has been confirmed that the court crafts of the outer court represent the common standards of East Asia, while the court crafts of the inner court represent the underlying culture of each region and ethnic group, making them appropriate materials for examining each court in relative terms.

研究分野：工芸史

キーワード：物質文化　東アジア　宮廷　工芸　礼制　有職

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、前近代の日本の宮廷工芸（宮殿・調度・服飾）を対象とする研究に取り組んできた。その研究の過程で、工芸品の歴史研究については、従来のような技法や意匠などに関心をおいた美術史的見地のみならず、社会・制度・習俗などを含んだ生活様式を反映する資料として理解する視点が重要であるという認識を深めて、欧米で発達した物質文化研究 （Material Culture Studies）の研究理念や研究方法に関心を抱くようになった。物質文化研究は、人間文化の物質的側面を対象としながら、「もの」に現出する形式・意匠・技法などの造形様式に留まらず、「もの」の背景にある風土・社会・制度・習俗などの生活様式にまで考察を及ぼすものである。そこで応募者は、人間の生活にとって工芸品は不可欠であり、その造形様式には、それらを用いた人間の生活様式が必ず反映するという命題のもと、日本の宮廷工芸を対象とする物質文化研究に取り組んできた（猪熊兼樹『宮廷物質文化史』中央公論美術、2017 年ほか）。また、研究代表者は、中国の北京故宮博物院（紫禁城）が所蔵する宮廷工芸の調査を行ったことを契機とし、研究の対象を東アジア地域に拡大して、韓国の国立古宮博物館、ベトナムのフエ宮廷博物館、沖縄の首里城などの調査を行うことを通じて、東アジアの宮廷工芸には共通規格があり、その共通規格は古代中国において発達した礼制と密接な関係をもつことを確認した。そして、東アジアの宮廷を対象とする「東アジア礼制に基づく物質文化研究　―日・中・韓・越・琉の宮廷工芸を対象として―」（2017～19 年度）科学研究費補助金〔基盤研究Ｃ〕）に取り組み、日本・中国・韓国・ベトナム・琉球の宮廷が国家の公的空間である外廷と君主の私的空間である内廷から構成されることに着目し、いずれの宮廷においても、外廷の宮廷工芸には礼制に基づく共通規格が現出するのに対し、内廷の宮廷工芸には各地・各民族の基層文化が反映した相異特色が現出するという事象が存在するのではないかという関心を深めるに至った。

２．研究の目的

本研究の目的として、①東アジアの実情に即した物質文化研究の構築、②多文化共生に資する相対的文化史観の提示の２点を挙げる。

①東アジアの実情に即した物質文化研究の構築

日本における工芸史研究は、「もの」に現出する形式・意匠などの造形様式や作者・技法に関心をおいた美術史の一分野として発達した経緯があり、「もの」の背景にある風土・社会・制度・習俗などの生活様式にまで考察を及ぼす物質文化研究としては未発達の感がある。また、欧米の研究者が東アジア地域を対象とする物質文化研究は、欧米式の学術理論を応用するため、必ずしも東アジアの実情に即さない点が見受けられる。そのような状況のもと、本研究は、東アジア宮廷の普遍規範である礼制や各地・各民族の基層文化に基づいた検証を行うことにより、東アジアの実情に即した実証的な物質文化研究の構築を目指す。

②多文化共生に資する相対的文化史観の提示

従来、東アジア文化圏の枠組みで日本文化を論じるとき、歴史的に交流が盛んであった中国や韓国の文化との影響関係を検証するのが一般的であった。これに対し、本研究では、諸文化の内容を均等に論じる相対的文化史観に基づいて東アジアの宮廷工芸を検証するので、例えば、日本の宮廷文化との影響関係が希薄であるベトナムや沖縄（琉球）などの宮廷文化とも積極的に相対させ、相互の共通規格や相異特色の検出に努める。本研究の成果は、諸文化の相異特色について合理的に理解し、今日的課題である多文化共生に資する歴史研究となることを念頭におく。

３．研究の方法

本研究の研究計画および方法は、①実物資料調査、②文献史料調査、③生活習俗調査、④相対的検証に大別される。これら諸調査は、同時並行的に進めるよう努めた。

①実物資料調査

本調査は、現存する東アジア宮廷の宮殿・調度・服飾の実物資料を対象とし、それらの形式・意匠などについて様式分類するものである。本調査において重視することは２点ある。第１は、東アジア宮廷の普遍規範である礼制に基づいて製作された宮廷工芸に現出する共通規格の検証である。第２は、各宮廷の背景にある風土・社会・制度・習俗などが反映して宮廷工芸に現出する基層文化の検証である。

②文献史料調査

東アジアの宮廷では、儀式・行事において秩序理念を具現するため、宮殿・調度・服飾の形式・意匠などの規格に言及している。従って、宮廷の儀式・行事の内容に対する理解は欠かせない。いずれの宮廷においても、儀式・行事に関する詳細な記録を蓄積しているのが通例であり、それら文献史料の調査を通じて、宮廷工芸の規格・使用時期・使用場所・使用者などの記録分類を行う。

③生活習俗調査

東アジア宮廷における宮殿・調度・服飾は儀式・行事ごとの各種礼法によって用いられた。宮廷工芸の実際用途には特殊な作法が要求されるのが常であり、その用例調査は重要である。いずれの宮廷においても儀式・行事を絵図などによって記録しているので、それら絵図資料を用いて使用状況を調査する。また、京都の葵祭（賀茂祭）などの伝統行事における宮廷工芸の用例を調査することを通じて、実物資料の背景にある生活習俗に対する理解を得る。

④相対的検証

上記①～③の諸調査は、同時並行的に進めて、東アジアの宮廷工芸の実物資料・文献史料・生活習俗を総合的に分析する。そして、その総合的な分析に基づき、各宮廷の工芸について相対的な検証を行い、東アジアの実情に即した実証的な物質文化研究を構築する。また、本研究では、東アジアの宮廷工芸について世界各地の時代・地域・民族の工芸品とともに共通認識のもとで比較検討しうるように、汎用性を意識した研究体系を構築することに努めた。

４．研究成果

東アジア文化圏の中枢にあった中国の宮廷では儒教的秩序の維持に努め、その理念を礼制によって具現した。礼制は身分に応じた建築・器物・衣服などの形式や意匠の規格に言及するために物質文化と密接な関係をもつ。そして、礼制は東アジア各地の宮廷に広がり、時空を超えた普遍規範となって国家の公式空間である外廷を形成した。一方、君主の私的空間である内廷は各地・各民族の背景にある風土や生活習俗などが反映した工芸によって形成された。従って、外廷の宮廷工芸には東アジアの共通規格が現出し、内廷の宮廷工芸には各地・各民族の基層文化が現出するので、各宮廷を相対的に検証するうえでの好資料となることを確認した。

東アジアの宮廷工芸（宮殿・調度・服飾）の研究については、従来のような年代・様式・技法などに関心をおく美術史的見地ばかりでなく、宮廷の儀式・行事における身分・立場・状況などを表象する物質文化として理解する観点が重要であることを示した。東アジアの宮廷工芸には、礼制に基づく共通規格とともに、各宮廷の背景にある風土・社会・制度・習俗などを反映した相異特色も現出するので、相対的に検証するうえで好資料となるという観点を示した。本研究は、諸文化を相対的に論じる文化相対主義的歴史観に基づくため、その研究成果は、諸文化の相異特色について合理的に理解し、今日的課題である多文化共生に資する歴史研究となるであろう。

研究期間全体を通じては、コロナ禍に伴う海外渡航制限が行なわれているなかで、国内において行なえる調査を進め、リモート会議を行ない、研究代表者が所属する東京国立博物館での展覧会などの機会を利用して展示・図録・講演などの方法によって研究成果の公表に努めた。

【研究期間中の特別展など】

特別展「琉球」（東京国立博物館、2022 年 5 月 3 日～6 月 26 日）

特別デジタル展「故宮の世界」（東京国立博物館、2022 年 7 月 26 日～9 月 19 日）

TNM & TOPPAN ミュージアムシアター「故宮 VR　紫禁城・天子の宮殿」（東京国立博物館、2022 年 7 月 26 日～10 月 16 日）

特別展「東京国立博物館のすべて」（東京国立博物館、2022 年 10 月 18 日～12 月 18 日）

特別展「琉球」会場
琉球宮廷工芸

特別展「東京国立博物館のすべて」会場
鳳輦（孝明天皇御料）

特別デジタル展「故宮の世界」会場
清朝宮廷工芸

特別デジタル展「故宮の世界」会場
デジタル多宝閣

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 猪熊兼樹	４．巻 ー
２．論文標題 コラム「琉球の宮廷」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 特別展「琉球」図録	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 猪熊兼樹	４．巻 －
２．論文標題 コラム「在りし日の鳳輦」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 特別展「東京国立博物館のすべて」－	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 猪熊兼樹
２．発表標題 琉球の宮廷文化
３．学会等名 東京国立博物館連続講座「未来へつなぐ琉球・沖縄文化」
４．発表年 2022年

〔図書〕　計1件

１．著者名 富田 淳、市元塁、猪熊兼樹、植松瑞希、西木政統、六人部克典	４．発行年 2022年
２．出版社 東京美術	５．総ページ数 96
３．書名 もっと知りたい中国の美術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関